

ヨソモンと里人

内陸と庄内を分かち最上峡を擁し、周囲を険しい山と大河に囲まれている戸沢村。筆者が住むこの村に入るには、トンネルや狭い山間地を必ず通らねばならない。だがこのような隔絶された地域にあっても、昔から外部者（ここでは便宜的に「ヨソモン」という語を用いたい）との活発な交流があった。中心部の古口地区は、かつては内陸と庄内を結ぶ舟運の要衝であり、維新後はキリスト教伝道師が多く入ってきた歴史を持っている。今でも古口では庄内弁のアクセントが方言の中に息づき、敬虔なクリスチャンもいる。村で最も山間に位置する角川地区においても、旧月山登拝道が通っており、多くの参拝者が訪れていたことが記録に残っている。そういう意味では戸沢村は、歴史上、必ずしも閉鎖的なムラ社会であったというわけではなかった。おそらく東北のどこの農山村も多かれ少なかれ「ヨソモン」との交流をもちながらその暮らしや文化を育んできたことだろう。

このように、かつて活発だったヨソモンとの交流も高度経済成長時代以降は下火になってしまったようである。それは物質的なものよりはむしろ感情的な面で都市と農山村との間で大きな断絶が生み出されてしまったのではないかと筆者などは思う。本来「ヨソモン」という言葉には差別的なニュアンスがあったはずだが、今、戸沢村では、草の根的な住民活動の中でヨソモンと里人の新しい関係が生み出そうとしている。

筆者が住み込んでいる角川地区では、住民がはじめた地域活動に昨年からは多くのヨソモンが参加してくるようになった。もともと人懐っこい性格の方が多い里人のこと、こうしたヨソモンとも一緒に活動をしていこうということになり、去年から「里親委員会」をつくって、外部からの活動参加者やボランティアの方々をホームステイ形式で受け入れることにした。

地元住民とは見る目線が違うヨソモンとの交流は確かに楽しい。地元では当たり前すぎてわからなかったよさが再発見されることが多いのだ。今年 5 月に田植え活動に訪れた東京の小学生の子ども達は、何を見ても「きれい」「すごい」「おもしろい」を連発し、住民をうれしがらせた。「何も特別なものを見せなくても喜ぶんだから、本当にいい観光客だよ」とあるおじさんは冗談交じりに語った。地域の土に根ざした活動を素材とする外部との交流は地元の子どもの達にとってもインパクトがある。先日、田の草取り活動に都会の女子大生を受け入れた。蛙や蛇にキャーキャー言う女子大生を目の当たりにして、地元から参加した子ども達（このときはたまたまみんな女の子ばかりだった）は、自分たちがいかに頼もしいか存在であるかを認識し自信を持ったようだ。普段は都会の生活やファッションにあこがれ、そのような環境にない自分たちを時に卑下することもある子たちがである。もっとも女子大生の方も負けてはいない。翌日の里山ウォークでは、地元住民との心温まるすばらしい交流を見せてくれたし、彼女らの率直なまなざしや言葉はこれから地域の活動を展開させるために大きな示唆となったはずだ。角川里の自然環境学校では、活動に際しなるべく外部の講師をお招きしてさまざまなアドバイスを頂くことにしている。先日来て

いただいた東京の方は、村の人々が共同して行う炭焼きの活動を見て、「ここはまるで別世界のような。こんなところが本当にあったんだね、すごく勉強になったよ」と声を漏らしながら。そして「こうした地域の活動をこんなふうには結びつけるともっと外部者も入りやすいし発展性が出てくるのでは」と新しい学習カリキュラムのためのアドバイスを下さった。このようにして里人とヨソモンの両者で一方的ではない双方向の学びが生み出されつつあるのだ。

今、里の住民が手作りで始めた活動は普遍性を帯びて多くのヨソモンをひきつけようとしている。また、里人もそのようなヨソモンを受け入れながら大切な何かを創り出そうとしている。角川里の自然環境学校では今年住民と語り合って「共創の里作り」をテーマのひとつに掲げた。これは地域住民だけではなくヨソモンと一緒に新しいふるさととライフスタイルを創り出していこうという意味だ。ここではヨソモンという言葉に差別的な意味はほとんどない。なぜならヨソモンは新しい風を土に根ざした里人に運んでくれるのだから。ヨソモンもまたその土に触れて何がしかの叡智を得ていくのである。